

4. 高齢者MDSにおけるQ-FISHを用いたテロメア研究

(老年病学教室) 福田沙羅、菊川昌幸、馬原孝彦、
新 弘一、岩本俊彦、高崎 優
(内科学第一講座) 指田吾郎、大屋敷一馬

【目的】 Q-FISH法を用い詳細なテロメアを測定し、MDSの
病因と病期進行の関係を検討した。

【方法】 MDS、13症例(年齢79±8才)の染色体浮遊液を
用いた。火炎固定後、CY3標識PNA probeにてhybridization
を施行し、各スポットの蛍光強度を計算した。

【結果】 全症例の平均値は467.5±101.8Uであった。各染色
体におけるテロメア分配は、4パターンに分類可能であっ
た。分配が極端に偏ったパターンを有する症例は、p53異
常と白血球化が有意に高率であった。

【結論】 Q-FISH法により、テロメア分配が極端に偏ったパ
ターンを有するクローンの出現が認められた。

5. 3回の再発を繰り返し、化学療法および末梢血幹細胞移
植を経て、4年以上第4寛解を維持しているALLの一例

(小児科学教室) 長島千香子、有瀧健太郎、松浦恵子、
加納美穂、宇塚里奈、田中こずえ、武隈孝治、星加明徳
(東京大学医化学研究所) 鶴田敏久
(聖路加国際病院小児科) 細谷亮太

【目的】 小児急性リンパ性白血病の治癒率向上は著しいが、
再発例の予後は依然不良である。今回我々は、3回の再発後、
化学療法や末梢血幹細胞移植を経て第4寛解を維持している
症例を経験したので報告する。【症例】 S63年3月初発の
ALL-L1、TCCSG11次SRプロトコルにて寛解を得る。H4年
9月骨髄再発、TCCSG12次remission protocolにてCRを得、
PBSCT施行。H6年2月2nd relapse。MIT-VEMP療法により
CRを得る。その後MTX、6MPによる維持療法、MIT-VEMP
療法による強化療法を反復後、ペスタチン内服継続していた
が、H9年2月3rd relapse。LTHP-AdVPにてCR、その後HD-
MTX、強化療法としてTHP-ADR+VP16+AraC、L-aspl+
VP+BHAC、L-aspl+VP+6MP、維持療法として6MP、MTX内服
にて現在4年4ヶ月以上第4寛解を維持している。【考察】 小
児ALL再発症例の予後は未だ不良である。文献上はこうした
高リスクALLに関して、極早期と治療終了後の再発を抑える
為の強力な治療が必要とされている。本症例は、3回の再発
を繰り返したが、第4寛解導入に成功、強力な維持療法を施
行せず寛解を維持している。本例に行った化学療法を呈示し、
若干の検討を行った。

6. t(20;ABL;22) masked Ph 慢性骨髄性白血病の1例

(内科学第一講座) 住 昌彦、伊藤良和、嶋本隆司、
栗山 謙、中嶋晃弘、宮澤啓介、木村之彦、大屋敷一馬

【緒言】 Ph陰性慢性骨髄性白血病でBCR/ABL陽性を示す症
例を経験したので報告する。

【症例】 61歳、女性。白血球および血小板増多を認め、
NAP scoreは低下。骨髄は過形成髄で骨髄系優位であり、
芽球は2.4%であった。Giemsa-banding法による染色体検査
では46,XX(20細胞)であった。しかし、RT-PCR、FISH法
ではBCR/ABLの再構成を認め、dual color FISH法では
BCR/ABL融合シグナルを22番染色体上に認めた。SKY法で
はt(20;22)を認め、9q34の異常は明らかではなかった。

【考案】 本症例はt(20;9;22)(q13;ABL;q11)を認めBCR/ABL
陽性、Ph陰性慢性骨髄性白血病の稀な1例であり、ABL遺
伝子を含む9q34部分の22q11への挿入がt(20;22)転座と同
時に発生したと推察された。

7. Angiocentric lymphomaを合併した胃原発anaplastic
large cell lymphomaの一例

(内科学第三講座) 小口尚仁、加藤せい子、武市美鈴、
藤本博昭、原田芳巳、荒川 敬、代田常道、林 徹
(病院病理部) 芹澤博美
(病理学第一講座) 向井 清

【症例】 75歳男性。【既往歴】 特記することなし。【家族歴】
特記することなし。【現病歴】 2000年8月心窩部不快感が出
現。2ヶ月間に6kgの体重減少及び全身倦怠感が出現し10月
下旬に前医を受診。胃malignant lymphomaを疑われ、精査
加療を目的に当院入院。【入院時所見】 左頸部リンパ節腫
脹、右肺中葉に腫瘤影を認める。【入院後経過】 内視鏡下
胃生検にてanaplastic large cell lymphomaと診断した。左頸
部リンパ節生検ではangiocentric lymphomaとの診断を得
た。両者の細胞形態は異なる上、免疫特殊染色にて比較検
討した結果両者は異なるマーカーに陽性であった。T-COP
療法を6コース施行し退院。完全寛解を維持し現在外来通
院にて経過観察中である。【考案】 Angiocentric lymphoma
を合併した胃原発anaplastic large cell lymphomaを経験し
た。若干の考察と共に報告する。